東京美術学校図画師範科・錦巷会編『図画と手工』誌の目次集（稿）について

丸　山　剛　史

本稿は、わが国における芸術的創造性を基調とした手工教育論の形成と展開に関する歴史的研究ための基礎的作業の一環をなすものである。本稿では、錦巷会編『図画と手工』誌をとりあげ、同誌の性格及び位置づけに関して述べることとする。

筆者は、さきに日本技術教育史研究に関する基礎的作業として、代表的な手工教育研究者の著作・論文を収集していることを記した[1]。この資料収集において、東京芸術大学附属図書館等に錦巷会編『図画と手工』誌が所蔵されていることを知った。同誌に関して確認したところ、錦巷会は、東京美術学校図画師範科関係者により組織されたものであることがわかった[2]。

東京美術学校図画師範科は、東京高等師範学校図画手工専修科とともに第二次大戦前の師範学校手工科担当教員の養成に重要な役割を果たした教員養成機関である[3]。また、大正期に「創作手工」を提唱し、芸術的創造性を基調とした手工教育論を展開した石野隆（1891～1967 年）らも同科出身であった。

『図画と手工』誌は、継続前誌である『錦巷』誌を含め、1911 年から少なくとも 1938 年までの四半世紀以上という、比較的長い間継続的に刊行されたものであった（今回確認し得たのは、そのうち 93 冊、表 1 参照）。そして、石野らはいうまでもなく、岡山秀吉（1865～1933 年）ら代表的な手工教育研究者も同誌に寄稿していた。

これらのことから、『図画と手工』誌は、手工教育史を検討していく上で欠くことのできない基礎資料の 1 つとなると考えた。しかし、1 つの機関にまとめて所蔵されているわけではなく、閲覧には不便であるため、今後の追究のために雑誌の目次を収集し一覧にすることを試みた。

錦巷会は、1911 年 3 月に発足したとされる[4]。『東京芸術大学百年史』によれば、図画師範科の「親睦団体」とされ、図画師範科関係教官や卒業生による講話、絵葉書競技、余興等を行い、卒業式の時期には各地の学校に赴任する生徒のために送別会を開催するなどしたとされる。

1911 年 4 月に発行された『錦巷』創刊号には「錦巷会会則」が掲載されており、錦巷会は、「会員相互ノ親睦団結ヲ謀リ且ツ技芸教育ニ関スル諸般ノ研究ヲナスヲ以テ目的トス」（第一条）と記されている。ここでいう会員とは、「本会ハ東京美術学校図画師範科職員卒業生並ニ在校生徒ヲ以テ組織ス」（第三条）と記され、東京美術学校図画師範科の職員、卒業生、在校生をさす。こうした会の目的を達成するために「毎月錦巷会ヲ開キ又雑誌ヲ編纂ス」と記されている。ここに記された「雑誌」が『錦巷』誌であり、『錦巷』誌は、図画師範科関係者の親睦及び「技芸教育」研究のための機関誌として刊行されたとみられる。

1915 年頃には、『錦巷』誌のあり方が検討された。『錦巷』第 4 号（1915 年 8 月）の「会告」によれば、『錦巷』誌の刊行は白濱徵（1866～1928 年）の寄付金によるところが大きく、白濱に迷惑をかけるとの理由により在京卒業生の間で協議が重ねられたとされる。また、研究の対象を「技芸教育」から「技能教育」に改めること、機関誌の名称も改め、機関誌の性格も会員間での「研究発表、通信交換」から「斯道の発達に資」すものに改めること等が提案された。

ここでいう「技能教育」に関しては、具体的に何をさすかは定かではないけれども、少なくとも図画教育及び手工教育は含まれていたと考えられ、『図画と手工』誌に先行して刊行された図画教育会編『図画教育』誌（1903～1915 年）と異なり手工教育をも位置づけていた点、全国に会員を募った手工研究会編『手工研究』誌（1907～1941 年）と異なり東京美術学校図画師範科関係者が中心になっていた点は、『図画と手工』誌の特徴として指摘できるように思われる[5]。ちなみに、『図画教育』誌は、図画教育会解散により 1915 年 12 月に第 28 号をもって終刊を迎えたけれども、図画教育会解散の理由の 1 つに図画師範科の設置があげられており[6]、『錦巷』誌の名称等変更の検討は、図画教育会解散及び『図画教育』誌の終刊に関係していたものと思われる。

機関誌の名称及び性格変更に関して、「会告」は、次のように述べている。

「……技能科に関する教育雑誌の寡少なる折柄『錦巷』をして唯会員間の研究発表、通信交換の用にのみに止めず更に広く他の閲読を求め、社会との連絡をも得て斯道の発達に資したき冀望

あれば『錦巷』の名にては不便多かるべしと思はる就ては其体を表すべき名称並に之に適する体裁をも御気付の程御申聞これありたし勿論会名は何処までも錦巷会と称し雑誌のみを都合よき名に換へては如何やとの意なり。」

そして1917年6月には『錦巷』誌を改題し、『図画と手工』誌（第9号）が刊行された。第9号に掲載された「会告」は、機関誌の改題及び性格の変更に関して、次のように述べている。

「雑誌錦巷の改題については曩きに第四号誌上にも述べました通り、『錦巷』の名を改めることは如何にも堪へ難きことでありますが、雑誌錦巷は唯会員お互の間の機関雑誌たるのみに止めず、広く公開して斯道の為めに利用したいといふので、御相談申し上げました結果『図画と手工』といふ、其体をも表はし、又誰にも直ぐに分り易い名称にすることになり、依つて改めて去る二月十日付で御照会御賛同を求めましたところ、大多数の御賛成を得て、茲にいよいよ改題して発刊することになりました。……」

編集体制も改められ、「編集局」として、以下の人物が編集にあたることとなった。白濱徵、波根義三（以上、監修）、霜田利平（後の霜田静志、編集主任）、平岡信敏、石野隆、松岡圭三郎（以上、編集委員）。こうして『図画と手工』誌が刊行されることになった。

このように、『図画と手工』誌は、東京美術学校図画師範科関係者を中心に関係者相互の親睦をはかる機能を有しつつも、『図画教育』誌の終刊を受けるかたちで、「技能教育」、具体的には図画教育及び手工教育を主な対象とする研究誌としての側面を強化され刊行された教科教育に関する教育雑誌であったと考えられる。

注.

（1）拙稿「東京文理科大学内手工教室桐光会編『構成教育』誌の目次集について」名古屋大学大学院教育発達科学研究科技術・職業教育学研究室編『技術・職業教育学研究室　研究報告』第2号、2005年、51～77ページ。

（2）『図画と手工』誌が東京美術学校図画師範科関係者の編集によることは金子一夫『近代美術教育の研究　明治・大正時代』（中央公論美術出版、1999年、423ページ）でも言及されている。

（3）疋田祥人「師範学校手工科教員の養成における直接養成と間接養成」『産業教育学研究』第29巻第2号、1999年。

（4）財団法人芸術研究振興財団／東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第二巻』ぎょうせい、1992年、384ページ。

（5）『図画教育』誌及び『手工研究』誌に関しては、教育ジャーナリズム史研究会編『教育雑誌目次集成　第Ⅱ期・学校教育編　第20巻』（日本図書センター、1989年）所収の解説（執筆者は小熊伸一）を参照した。

（6）磯崎康彦・吉田千鶴子『東京美術学校の歴史』日本文教出版、1977年、127ページ。

表1. 錦巷会編『図画と手工』(『錦巷』)誌の刊行状況

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1911				1								
1912												
1913		2									3	
1914												
1915							4					5
1916			6				7					
1917	8					9,10						
1918	11			12			13			14		
1919			15									
1920		16	17			18	19	20	21	22	23	24
1921	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
1922	(37)～(58)											
1923												
1924	59	60	61	62	63	64	65	66	67	(68)	69	70
1925	71	72	(73)～(159)									
1926												
1927												
1928												
1929												
1930												
1931												
1932		154	(155)	(156)	(157)	(158)	(159)	(160)	(161)	(162)	(163)	(164)
1933	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176
1934	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188
1935	(189)	(190)	191	(192)～(203)								
1936					204	205	(206)	207	208	(209)	(210)	211
1937	(212)	213	(214)	(215)	(216)	217	(218)	(219)	(220)	(221)	(222)	(223)
1938	(224)	(225)	(226)	(227)	(228)	(229)	230	(231)	232	(233)	234	235
1939	236	237	238	239	240	241				242		

注1. 表の中の数字は号数を表す。

注2. カッコは欠号を表す。また、第243号以降の刊行状況は把握し得ていない。